
苺の絵の具

里緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苺の絵の具

【Nコード】

N1738BA

【作者名】

里緒

【あらすじ】

苺模様の壁紙が、リンゴに変わってしまいました。

朝目覚めると、
部屋の壁紙の苺が、リンゴに変わっていた。
苺好きの私のために夫が探してきてくれたものだったから、
なんだか悔しいような悲しいような、暗い気分になった。

一晩たつたら覚める夢だろうと思ったのに、
次の朝も、まだ壁にはリンゴが描かれていた。

むしゃくしゃして壁を叩くと、ゴロンとリンゴが落ちてきた。

ツヤツヤとした、美味しそうな赤いリンゴ。
でも齧ってみると不思議なことに、それは苺の味がした。

私はそれを皮ごとすりつぶし、
赤い絵の具、ではなく苺の絵の具を作った。

画用紙に思いつく赤いものを描いていく。
ポスト、炎、リボン……

書き上げると白い画用紙の上に、まるで本物みたいに絵が浮かび上
がった。

紙の上で実体化されたそれらは、すべて苺の香りを漂わせていた。

しかし、ポストは触れると、炎は吹くと、リボンは結ばうとすると
消え、

代わりに紙の上には、苺が3つ転がっていた。

これは苺が見せた蜃気楼のようなものなのかもしれない。

余った苺の絵の具からは、濃厚な苺の香りがする。

子どもの頃によく連れられた、苺畑のような。

私はそれを飲み干した。

でも何も起こらない。

もしかしたら血液が苺ジュースのようになっていくのかもしれないが、
切って確かめようとは思えなかった。

私が胸をコツンと叩くと、

心臓が、キュツと小さくなったのが分かった。

でもそれだけで、痛くも苦しくも何もない。

ただ苺の香りだけを感じる。

ああ、これはきつと一晩たったら覚める夢だわ。

苺の香りでいっぱいになった部屋で、私は幸せな夢を見た。
大好きな大好きな苺と、家族に囲まれている夢を。

次の日の朝、息子が珍しく早く起きてきたのでトーストを焼いた。

「お母さんが作った苺ジャムは、やっぱりおいしいね。」

ありがとう。

でもね、

「が「じゃなくて」「だよ。」

(後書き)

お母さんは母になってしまいました。という話でした。
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1738ba/>

苺の絵の具

2012年1月4日13時50分発行